

Title	ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代,あるいは諦念の人々』初稿(1821年): 翻訳の試みと覚書(7)
Sub Title	J. W. Goethe : Wilhelm Meisters Wanderjahre oder Die Entsagenden (I. Fassung). Übersetzung und Anmerkungen (7)
Author	山本, 賀代(Yamamoto, Kayo)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2023
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.64 (2023.) ,p.63- 88
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20231031-0063

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

ヨーハン・ヴォルフガング・ゲーテ
『ヴィルヘルム・マイスターの遍歴時代、
あるいは諦念の人々』初稿（1821年）
——翻訳の試みと覚書（7）——

山本賀代

試訳¹⁾

第13章²⁾

この章で私たちは、本来ならば前章以上に中間の言葉をはさんで弁解する必要があるだろう。つまり、確かに前章ではすべてを左右するはずの

- 1) 翻訳の底本には Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke. Briefe, Tagebücher und Gespräche*. 40 Bde. Hg. von Hendrik Birus u.a. Frankfurt am Main 1987–2013 [=FA] の Bd. 10: *Wilhelm Meisters Wanderjahre*. Hg. von Gerhard Neumann u. Hans-Georg Dewitz. Frankfurt am Main 1989 [=FA10] を使用し、同書の詳細な解説・注釈とともに Johann Wolfgang Goethe: *Sämtliche Werke nach Epochen seines Schaffens*. Hg. von Karl Richter in Zusammenarbeit mit Herbert G. Göpfert u.a. München 1985–1998 [=MA] の Bd. 17: *Wilhelm Meisters Wanderjahre. Maximen und Reflexionen*. Hg. von Gonthier-Louis Fink, Gerhart Baumann und Johannes John. München 1991 [=MA17] を常に参照した。今回訳出した範囲は FA10, S. 145–164。脚注には主として2稿との異同（訳文中で明示可能な異同にはアンダーラインを引いている）を記した。ただし引用符の有無、句読点の変動や正書法の修正・変更、さらに内容に影響のない表現や構文上の変更については詳細を省略した場合もある。以下、作品名は『遍歴時代』と略す。
- 2) 第4段落より2稿の第2巻第8章に対応（注5を参照）。

画家とその女弟子のスケッチを提示することができなかった。完成された芸術家の卓越さも芸術を愛する美しい女性の初心者ならではの限界と急成長も、私たちは目の前にお見せすることができなかった。それでも記述はまったく物足りないままということはなく、心に沁みるもの、感性を高めるものを少しはお伝えすることができたのである。しかし今度の章では、厳密に扱うことが望まれるある大きな対象を話題にするにもかかわらず、残念ながら書かれたものはわずかしか存在しない。伝わっているものなのかから完全な見解が現れることを、私たちは期待できないのである。

このような状況から明らかになるのは、私たちは小説を書く場合、まさに世界史を記述する際の状況と同様に、不明確な日付に苦勞するということであり、出来事の時系列についてきっぱりと確定することができないということである。私たちがもっとも確実な点にとどまるのはそのせいなのである³⁾。

ヴィルヘルムが招待された祝祭にやって来たところを見ると、このあいだにヴィルヘルムが教育州を去って一年が過ぎたことがわかる。しかし遍歴の諦念者たちは不意に姿を隠し私たちの前から姿を消してしまうかと思うと、今度は予期せぬ場所に姿を現すものだから、彼らが隠れているあいだにどのような方向に道をとっていたのかを正確に跡づけることはできない⁴⁾。

今、この遍歴者は平坦な地形の側から教育州へと入ってきて草原を越え、いくつかの小さな湖水を迂回して草地を歩いている⁵⁾。森というより

3) この編集者のコメントは2稿ではすべて削除される。「厳密に扱うことが望まれるある大きな対象」とは、やはり2稿で削除される本章の最後の箇所(注37を参照)で報告されるヴィルヘルムと『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』(1795-96年)の登場人物たち、とりわけナターリエとの信じがたい再会とヴィルヘルムの諦念の問題を指すものと思われる。

4) 2稿では削除される。

5) 2稿の第2巻第8章冒頭にあたるが、出だしは少し表現が異なる。2稿

は灌木に覆われた丘が視界に入り、いたるところ、さえぎるものもなく動物の動く気配もない大地を見渡すことができる。このような小道を通りながら、彼には自分が馬の飼育地帯にいたことがまもなくわかった。実際に、あちらこちらに雌馬や子馬⁶⁾の大小の群れを見つけた。しかし急にひどい砂埃が凄まじい勢いで生じ、近づいてきて水平線を覆い、辺り一面を包みこんだが、ようやくわきから吹きつけたさわやかな風が砂塵を追いはらうと、なかの喧騒が明らかになってきた。

この高貴な動物たちの大群が疾走してこちらに近づいてきた。馬たちはばらけることもなく、乗馬した管理者たちに誘導されていた。遍歴者のわきをこの騒々しい群勢が駆けぬけていったとき、番人たち⁷⁾のなかの一人の美しい少年が不思議そうに彼を見つめ馬を止めると、飛びおりてきて父親をかき抱いた。

ここから問いと説明が始まる。少年は自分には田園生活が合わなかったこと⁸⁾、収穫祭はたしかに良かったが、そのあとの鋤で畑を耕したり掘りおこしたりする⁹⁾のはまったく気に入らなかったことを報告した。これらのことは上の人たちの目にもとまり、この子は動物たちを相手にするのが好きなことにも気がついた。そこで彼らは少年に生活に不可欠で有用な家畜に目を向けさせ、物静かな牧人として育成しようと試みたが、結局はも

ではヴィルヘルムは「しばらく前から目を離していた友」(FA10, S. 516)と表現され、彼の教育州再訪には1年以上の月日が流れていることがほめかされる。以下、数段落にわたり、ところどころ表現の差しかえが見られる。

- 6) 2稿では「性別も年齢もさまざまなこの高貴な動物」に変更される(ebd.)。
- 7) 2稿では「つき添う番人たち」に変更される(ebd.)。
- 8) フェーリクス¹⁰⁾の年齢設定の変更にともない、2稿では少年(Knabe)から息子(Sohn)に修正されている。またフェーリクスの報告冒頭には、自分の馬と引きはなされ辛かった話が追加され、田園生活の記述も書きなおされている(ebd.)。
- 9) 2稿では「世話をすること(Abwarten)」が追加される(ebd.)。

つと活発な馬乗りに育てることにした。そういうわけで自分自身若い子馬のような彼は、今では有能な仲間たちに守られながら、子馬たちの番をし、餌をやり、育て、世話をすることになっているということだった¹⁰⁾。

父子は馬の群れを追いながら、ぼつりとぼつりと点在する広大な農場を通りすぎ、大きな市場祭が催されている市場町といってもよい場所に到着した¹¹⁾。そこは信じられないほどの雑踏でごったがえし、商品と売り子のどちらがより埃をたてているのか判別することは難しかった。高貴で¹²⁾入念に飼育された馬を得ようと、あらゆる国から買い手たちが集まり、世界中の言語を聞くことができるように思われた。ときどき吹奏楽器の賑やかな音が場を盛りあげるように鳴り響き、すべてが活動と活力と生命力の現れだった。

遍歴者¹³⁾が前回の¹⁴⁾監督者を再び見つけると、彼は別の男を紹介してくれた。さらに三人会の一人に引きあわせられ、この男から、ただ通りすがりではあったが、祝福するように歓迎を受けた¹⁵⁾。

ヴィルヘルムはここでまたしても独占的な教育と生活管理の実例を体験し¹⁶⁾、荒々しく、いくらか無骨な仕事をして動物たちを養いながらも、青

10) 報告の後半部も全体の書きなおしと追加が見られ、2稿では上の人たち (die Vorgesetzten) でなく、フェーリクス自身の視点から描写される (ebd., S. 516f.)。

11) 2稿ではこの段落の冒頭に、立派な青年に成長したフェーリクスにヴィルヘルムが満足するくだりが追加される。段落内には若干の表現の差し加えもある (ebd., S. 517)。

12) 2稿では「高貴な血筋 (Abkunft) の」に変更される (ebd.)。

13) 2稿では「私たちの遍歴者」に変更される (ebd.)。

14) 2稿では「すでに知りあいになった」が追加される (ebd.)。

15) 2稿では「彼は他の有能な男たちと一緒にだった。彼らはそつと、いわば気づかぬうちに風紀や秩序を維持することを心得ているような人々である」に変更される (ebd.)。

16) 2稿では段落替えなしで、「ヴィルヘルムは独占的な活動 (Beschäftigung) と、どれほど広がりがあるように見えても、限定された生活管理の実例を

年が自分自身は動物のように粗野になることを阻止するために、生徒たちに他にどのような訓練をさせている¹⁷⁾のか知りたい¹⁸⁾と願った。そして、まさにこのような腕力勝負で無骨に見える仕事と、世界でもっとも繊細な仕事、つまり¹⁹⁾言語の訓練や完成²⁰⁾が結びつけられていることを聞き、彼は非常に喜んだ。

つまり、ここはあらゆる方面から若者たちが集まることが特徴であるから、異国でよく見かけるように、同郷の人々同士で集まり、よその国の人々から離れて徒党を組むようなことを避けるために、意のままに言葉を用いて意思疎通し、互いに近づきあうよう努めている、という話であった²¹⁾。

しかしもっとも必要になるのは公用の言語訓練である。なぜなら、このような祝祭市ではどの異国の人々も自分自身の調子や表現で存分に対話し、値引きの交渉をできるだけ有利に進めようと望むものだからである。そこでバベルの塔のような言語混乱²²⁾や墮落が生じないように、一年間、月ごとに一言語のみ公用語として話される。これは、克服するように定められた領域以外では、何も学ぶ必要はないという原則にしたがうものである。

「私たちは生徒たち一人一人を」と監督者は言った、「泳ぎ手のように見えています。彼らは自分たちをのみこもうとする水の脅威のなかで、水に支えられ、運ばれ、身が軽くなっていくのを感じ、不思議に思うのです。」

「しかしこのように騒がしく見える生活のただなかでも、同時に、独り

見かけたように思われ」に変更される (ebd.)。

17) 2稿では「訓練をするのが常である」に変更される (ebd.)。

18) 初稿では wissen, 2稿では erfahren (ebd.)。

19) 2稿では nämlich は削除される (ebd.)。

20) 初稿では Ausbildung, 2稿では Sprachbildung (ebd.)。

21) 2稿では1段落追加(フェーリクスを見失ったヴィルヘルムに監督者がどのように生徒たちを把握しているのかを説明するくだり)されたあと、監督者の説明の続きとして言語教育の必要性が語られる (ebd., S. 517f.)。

22) 2稿では「混乱」に短縮される (ebd., S. 518)。

きりで静かな手すきの時間、つまり退屈と言ってもいいような時間がたくさんありますので、生徒たちの誰かがあるひとつの言語に特別な愛着を訴す場合には、信頼できる徹底的な授業が用意されています。髭を生やしたり、あるいはまだ生えてもないこのケンタウロスたちのなかから、馬に乗る文法家を探しだすことはあなたには難しいかもしれません。でも、なかには細部にまでうるさい者もいるのです。あなたのフェーリクスはイタリア語を学ぶことに決まりました。彼が牧人生活に退屈したときに、愛らしく感情をこめて歌うのを聴いていただきました²³⁾。日々の生活における活動や有能さと十分な教育とは、人が考える以上にずっと矛盾しないものなのです。」

それぞれの区域が独自の祝祭を祝っているということで、客は器楽音楽の地区に案内された。この地区は平地に接していて、さっそく変化に富んだ谷間、小さくすらりとしたいくつもの林、そして穏やかな流れが心地よく優美な姿を見せはじめた。小川のわきの芝生の下には、あちらこちらに苔むす岩が控えめながら突きでていた。丘の上にはぼつりぼつりと茂みに囲まれた住居が見えた。ゆるやかな勾配の低地では住宅は比較的密集してひしめいていた。ゆったり点在する小さな家々のほうは、美しい音色も調子はずれの音も近隣に届かない程度に、互いに十分離れていた。

それから、彼らはまわりを建物にとり囲まれ陰になっている広い空間に近づいた。そこには男たちが次々と押しよせ、注意深く緊張気味に何かを待ちかまえている様子だった。ちょうど客が近づいたとき、あらゆる楽器が参加する大編成の交響曲が演奏され、その完璧な力強さと繊細さにヴィルヘルムは驚嘆せずにはいられなかった。広い場所に設けられたオーケストラの向かいには²⁴⁾ 小さな楽団が立っていて、とりわけ人の注意を引きつけた。ここには低学年から高学年までさまざまな年齢の生徒たちがいて、

23) 2稿では「あなたもご存知のように、私たちの施設では旋律的な歌がすべてを通じて浸透していますので」が追加される (ebd., S. 519)。

24) 2稿では「かたわらには」に変更される (ebd.)。

演奏はせず、それぞれ自分の楽器を用意している。彼らはまだ全体のなかに入っていけない、あるいは入ろうとしない生徒たちだった。彼らが今にも飛びこもうとしている様子を興味深く眺めていると、何人かの才能が突然に開花することなしにこのような祭りが終わることはない、という話を聞くことができた²⁵⁾。

楽器の音に混じってこの地区でも歌声が響いてきたので、歌唱もまた優遇されていることに疑う余地はなかった。ここでは他にどのような教育がうまく連携しているのかとさらに尋ねたところ、それは詩である、しかも抒情的な詩であると遍歴者は聞かされた。ここでは²⁶⁾ このふたつの芸術がそれぞれ独自に成長し、次に対立したり協調しあいながら発展していくことにすべてがかかっている、というのである。生徒たちは両方の²⁷⁾ 芸術をそれぞれの制約のもとで知ることになり、次にこれらが相互にどのように制約しあうか、さらにどのように互いを解放しあうかを教えられるのである。

詩のリズムに対して音楽家は拍子を一定に刻んだり揺らしたりする。しかしこの場合、まもなく詩が音楽を支配するようになる。というのも、そうならざるをえないのであるが、詩においては常にできるかぎり純粋に音の長さを保とうとするのに対して、音楽家にとっては決定的に長いあるいは短い音節というものはほとんど存在しないからである。すると音楽家は韻律家の非常に誠実なやり方を好きなように破壊し、それどころか散文を歌に変えてしまう。そこには非常に奇妙な可能性が現れる。もし抒情的な繊細さや大胆さによって詩人の側から音楽家に畏敬の念を起こさせ、新しい感情をときには非常にゆるやかに、ときには迅速に生みだすことができないとすれば、詩人はまもなく自分がまったく台無しにされてしまったと感じることになるだろう²⁸⁾。

25) 2稿では「と自慢する声が聞こえた」に変更される (ebd.)。

26) 初稿では hiebei, 2稿では hier (ebd., S. 520)。

27) 初稿では beide, 2稿では eine wie die andere (ebd.)。

28) 細かい表現の差しかえはあるが、内容に変更なし。

ここにいる歌人たちはたいてい詩人でもある。ダンスも基本的なことは教えこまれる。これらすべての能力が各地域全体に万遍なく広がるように配慮されているのである。

境界を超えて次の地区に案内されると、突然まったく異なる建築様式が客人であるヴィルヘルムの目に入ってきた。家屋はもはや小さな家が点在するというふうではなく、整然と集合し、外観は美しく²⁹⁾、内部は広々と快適で上品だった。この地域にふさわしい開放的で立派な町であることが見てとれた。ここは造形芸術とその親戚関係にある手工業の地区であり、まったく独特な静けさがこの辺り一帯を支配していた。

造形芸術家は常に人間たちの営みのすべてに考えをめぐらすにもかかわらず、その仕事は孤独である。この非常に奇異な矛盾ゆえに、他のどんな仕事の場合よりも活気ある環境が絶対的に必要とされるのである。今ここでは、やがて人間たちの目を永遠にとらえることになるものを、誰もが寡黙に制作している。祝日の静寂がこの地区全体を支配し、もし立派な建築物を完成させるためにちょうど熱心に働いている石工が石を砕いたり、大工たちの規則正しい音があちらこちらで響いてこなければ、空気を振動させる音ひとつなかったであろう。

私たちの遍歴者の注意を引いたのは真面目さ、つまり初心者も上級者も同様に扱う驚くべき厳格さであった。自分自身の力で何かをなし遂げるといふふうな者は一人もなく、誰もが神秘的なひとつの霊に心の奥まで鼓舞され、ただひとつの大きな目標に導かれているように思われた。草案やスケッチはどこにも見当たらず、一本一本の線が慎重に引かれていた。遍歴者が全体のやり方について案内人に説明を請うと、彼は次のように述べた。「想像力は本来あいまいで不安定な能力です。造形芸術家の功績全体は、彼がこの力を徐々に定め、捉え、それどころか最後には現前するものにまで高めることを習得する点にあるのです。」

他の芸術においても確固とした原則の必要性に注意が向けられた。「音
29) 2稿では「立派で (tüchtig) 美しく」に変更される (ebd.)。

楽家が弟子に荒々しくむやみに弦をかき鳴らしたり、自分の好きなように音程を作りだしたりすることを許すでしょうか？ この場合、学習者に自由裁量の余地は何ひとつ残されていないことは明らかです。活動範囲は明確に定められ、とり扱う道具はすでに与えられています。道具を操作するやり方すら、つまり私が言っているのは指づかいのことなのですが、他の指の邪魔にならず、次の指が正しく動くように定められているのです。このような規則になかった協力があればこそ、ついには不可能なことが可能となるのです。

ところで私たちが厳格な要求、決定的な法則を主張する最たる根拠は何かということ、それはまさに生まれながらの才能をもつ天才こそが最初にこうした法則を理解し、その要求に心から服従するからなのです。生半かな能力をもつ者だけが、自分の限られた特殊な力を無条件の全体ととり違え、自分の誤った指づかいを抑えきれない独創性と自主性のせいにしたがるものなのです。しかし私たちはこれを認めず、生徒たちが間違った方向に進むことをなんとしても阻止します。そんな過ちによって人生の大部分、それどころか、ときには全人生が混乱し台無しにされるのですから。

私たちは天才とかかわることが何よりも好きなのです。というのも天才は優れた精神に満ち、自分に有用なものをすぐに認識することができます。天才は、芸術は自然ではないからこそ芸術であることを理解し、敬意を払うことも辞さない。因習的と呼べるものに対してすらそうなのです。つまりこれは、なしではすまされない不可欠なものを最善とみなすことにもっとも卓越した人々の意見が一致したという事実以外の何だというのでしょうか？ そしてこれこそが、どのような場合でも幸福にいたる道ではないのでしょうか？

他の地区と同様に、ここでも教師の負担をおおいに軽減してくれるのは三つの畏敬とそのしるしなのです。これらがその場の仕事の性質に合わせいていくらか姿を変えて導入され、心に留められているのです。」

さらにその周辺を案内された遍歴者は、この町がずっと広がり、多様な

光景を示しつつ、通りから通りへと展開していく様に驚かずにいられなかった。建物の外観からその建物の役割は明白だった。それらは上品で堂々としており、華麗というよりは美しかった。町の中心部の比較的高潔で厳かな建物が終わると、次には晴れやかな建物が心地よく続き、最後は優美な様式をもつ小ぎれいな郊外が野原に向かって延び、その先にはあずまやが点在していた。

ここで遍歴者は、先ほどの地域の音楽家たちの住居は、画家や彫刻家そして建築家たちが住む目の前の家々とは美しさや広さの点でとうてい比べものにならない、という見解を述べずにはいられなかった。すると、それは事柄の性質によるものだと返ってきた。つまり音楽家は常に自身の内面に向かい、その内奥にあるものに形を与え、外に向けなければならない。それゆえ音楽家は目という感覚に甘えることは許されない。目はいとも簡単に耳を欺き、精神を内から外へと誘惑するからである。その反対に造形芸術家は外的世界に生き、自分の内面をいわば無意識に外的なものにおいて、また外的なものなかで表明しなければならない。造形芸術家は国王や神々のように住まわなければならない。そうでなければ、一体どうやって彼らは国王や神々のための家を建て、装飾する気になるだろうか？ 彼らの作品の内部で、また彼らの作品に接して庶民たち全体が自分たちを気高く感じられるように、造形芸術家は低俗なものを克服しなければならないというのである。

それから私たちの友はもうひとつ別の矛盾について説明を受けた。「他の地区ではあれほど活気づき、騒がしい熱狂を引きおこしているちょうど祝祭の日々に、なぜここではこんなにも大きな静けさが支配し、仕事がずっと続けられている³⁰⁾のでしょうか？」

その理由は次のとおりだった。「造形芸術家には祝祭は必要ありません、なぜなら、彼にとっては一年を通じて毎日が祝祭だからです。もし彼が何か素晴らしいものを完成させたら、それは彼の目の前に、そして全世界の

30) 2稿では「中止されない」に変更される (ebd., S. 523)。

目の前にずっと存在し続けます。ゆえにくり返したり、再び努力したり、新しく成功する必要などないのです。一方、音楽家はいつもそのようなことに苦心しています。そこで音楽家には、全員がそろった輪のなかで、できるだけ立派な祝祭を催してやらなければならないのです。」

「しかし」とヴィルヘルムは返した、「この数日間は展覧会を開催してもよさそうなものではないでしょうか。そうすれば、とりわけ有能な生徒たちの三年間の成長を楽しく吟味し評価することができるでしょう。」

「他の場所でなら」と相手は応じた、「展覧会が必要とされるかもしれませんが、私たちのところでは違います。私たちの全存在が展覧会なのです。ここではあらゆる種類の建築物がご覧になれますが、これらはすべて生徒たちの作品です。もちろん何度もくり返し議論し、じっくりと検討を重ねた図面にしたがって造られたのです。建築家にはいろいろ試行錯誤してみることは許されませんからね。建築物はしっかりと、永遠とは言わなくとも、かなり長い期間にわたって十分に³¹⁾持ちこたえ、存続しなければなりません。失敗することはあっても、失敗作を建ててしまうことは許されないのです。」

「相手が彫刻家なら私たちはもっと寛大にふるまいますが、もっとも寛大になれるのは画家たちです。両者ともそれぞれのやり方で、あれこれ試行することが許されます。建物の内部でも外部でも、また広場であっても、装飾したいと思う場所は彼らの自由裁量に任されています。彼らが自分の意向を伝え、それがある程度妥当であるとみなされれば、実行にうつすことができるのです。しかもふたつのやり方があります。もしその仕事が芸術家本人に気に入らなければ、作品を早晩、撤去することができるという特別措置つき、あるいは一度設置されたものは決してその場所からとり除かせないという条件つきです。たいていの者は前者を選び、撤去の可能性を保留しておきます。そうすると、たいていもっとも良い形で助言を受けることができるのです。一方、後者のケースが生じるのはより稀なことで

31) 初稿では genügend, 2 稿では genügen (ebd., S. 524)。

すが、この場合に目につくことは、芸術家は自信が足りない分、仲間や識者と長く協議を重ね、その結果、本当に価値のある残されるべき作品を生み出すことができるということです。」

こうしたすべての説明のあと、さらにこのあと他にどのような授業が続くのかとヴィルヘルムは問うことを怠らなかった。それに対する答えとして、文芸、しかも叙事詩であることが告げられた。

しかし続けて次のような説明を聞いたとき、ヴィルヘルムは奇妙に思わずにはいられなかった。「古今の詩人のすでに完成された詩を読んだり朗読したりすることは、生徒たちには許されません。彼らには一連の神話、伝承や伝説が簡潔に伝えられるだけなのです。こうすると、絵画あるいは詩の実践において、いずれかの芸術に専心した才能の創造力のどこに独自性があるのか、すぐに認識できるのです。詩人も画家もたったひとつの源泉のもとで仕事をし、要請にしたがって自分の目標に到達するため、どちらも自分の側に水を引きよせよう、自分に有利に誘導しようとしています。これは、すでに完成されたものをもう一度つくり直そうとするよりも、ずっとうまくいくものなのです。」

それがどのように起こるのか、旅人は自分自身の目で観察する機会を得た。何人かの画家たちがひとつの部屋で仕事をしていた。そこでは一人の元気な若い仲間がひとつの単純な話を事細かに物語っていた。彼は自分の話を完璧に終わらせるために、画家がさまざまな筆のタッチを用いるのと同じように、多彩な言葉を駆使していた。

相手の断言するところでは、共同で作業するうちに仲間のあいだで気持ちのよい会話が生まれ、その過程で即興詩人が誕生することがよくあるという。彼らはこの二重の表現に対する大きな熱狂を呼びおこすことができるのである。

ここでヴィルヘルムは造形芸術に注意をもどした。「あなたがたのところでは」と彼は話した、「展覧会が開催されないのですから、きっと懸賞課題もないのでしょうか。」「実は、そのとおりです」と相手は応じた、

「このすぐ近くで、私たちがもっと有用だと思っているものをお見せしましょう。」

彼らは上方からしっかり照らされた大きな広間に入っていった。芸術家たちが大きな輪になって制作しているのがまず目に入ってきた³²⁾。輪の真ん中には巨大な群像が良い構図で配置され、そびえ立っていた。闘う姿勢をとった男女のたくましい姿は、猛々しい若者たちとアマゾンの女戦士たちの激闘を思いださせた。この闘いは、憎しみや敵意が最後には互いへの親しみと助けあいが変わっていく。この奇妙にもつれあった芸術作品は、周囲のどこからでも同じように具合よく鑑賞することができた。造形芸術家たちが広い輪となつてとり囲み³³⁾、座ったり立ったり、思い思いのやり方で作業をしていた。画家はイーゼルに向かい、素描画家は製図板を持っている。立体像を造形する者もあれば、平面に浮き彫りを施す者もある。さらに建築家は、将来、このような芸術作品を設置するための台座を設計していた。参加者の誰もが自分流に模倣していた。画家や素描家は群像を平面上に写すのだが、台無しにしてしまわないように、できるかぎり元の姿を残し、慎重に作業していた。浮き彫りの制作でも同様に扱われた。一人だけがこの群像全体の縮小版を再現していたが、いくつかの動きや諸部分の関係性において彼はこのモデルを凌駕しているように思われた。

ここで、この人物こそこのモデルを制作した巨匠であることが明かされた。彼は大理石で制作する前に、批評家たちの吟味ではなく実際の吟味に作品を委ねたのである。共同制作者たちのそれぞれが独自の方法や考え方にしがたって、そこに何を見て、何を残し、何を変更したのかをつぶさに観察し、もう一度しっかりと考えぬく過程で、彼はそれを自分のためになるよう利用することを心得ている。その結果、大理石の素晴らしい作品

32) 初稿では in die Augen fallen, 2稿では sich zeigen で表現されている (ebd., S. 525)。

33) 初稿では in einem weiten Kreise umher, 2稿では in einem weiten Umfang (ebd.)。

が制作されそこに立つとき、一人が企画し、着手し、完成させたとはいえ、それはすべての人々のものとみなすことができるというのである³⁴⁾。

この部屋にも深い静寂が支配していた。しかし監督が大きな声で叫んだ。「静止したこの作品を前にして、その特徴を台無しにすることなく的確な言葉で描写し、目の前にあるこの塊が再び溶けだすほどに私たちの想像力をかきたて、芸術家がここに造形したこの作品こそがもっとも素晴らしいと私たちに納得させてくれるのは、一体誰だろう？」

全員から名指しであと押しされた一人の美しい青年が、自分の仕事をわきにおいて前に進みでると、静かに語りはじめた。彼は目の前にある芸術作品をただ描写しているように思われたが、やがて文芸本来の領域に突入すると、筋の展開の中心に沈みこみ、感嘆するほどにその本領を発揮した。立派な朗読を通して彼の表現は徐々に高まり、群像の塊が本当に動きだして回転し、像の数が二倍にも三倍にも増えるかのように思われた。ヴィルヘルムはうっとりして立ちつくし、最後にこう叫んだ、「ここまで来たら、本当の歌に、つまり旋律をもつ歌に移行したとまらない者などいるでしょうか。」

「それは願いさげいただきたいですね」と監督者は応じた、「私たちの優れた彫刻家に正直に言わせれば、彼が私たちの詩人を気に入ることが難しいのは、双方の芸術家をもっともかけ離れた存在であるからだと告白するでしょう。逆に私は賭けてもよいのですが、ここにいる画家たちのなかには、この作品から生き生きとした特徴をいくらかは自分のものにした者もあります。」

とはいえ、優しく気持ちのよい歌を聴いていただきましょう。君たち、私たちの友だちに厳粛にそして心をこめて一曲歌ってごらん。これは芸術全体を歌ったもので、私自身、この歌を聴くといつも深く考えさせられるのです。」

彼らは少し間をとって互いに目配せをし、身ぶりで打ちあわせを終える

34) この段落には若干の表現の差しかえがあるが、内容に変更はない。

と、心をとらえ精神を高揚させるような厳かな歌が次々と四方から響いてきた。

創作し完成させるために
芸術家よ、たびたび孤独であれ。
君のおよぼす力を楽しむために
仲間のもとに朗らかに急げ！
全体のなかで眺め感じるがいい
自分の生きてきたあゆみを、
そうすれば長年の活動が
君の隣人のなかで明らかになる。

思想も構想も
形態もその関係も
ひとつひとつが互いに切磋琢磨し、
ついには満足のいくものとなろう！
良い着想がひらめけば、抜かりなく考えぬき、
美しく造形し、心をこめて完成させる、
こうやって芸術家は昔から
巧妙にその技を身につけてきた。

千変万化の自然が
ただ唯一の神を明かすように、
芸術の幅広い分野には
永遠を本質とするひとつの感覚が息づいている。
これこそが真実の感覚であり、
美によってのみ飾られ、
悠然と、もっとも明るい昼間の澄みわたる

最高の輝きに目を向ける。

演説家や詩人が詩や散文に
心から打ちこむように、
人生の晴れやかな薔薇の花を
画布に鮮やかに描きだそう。
たくさんの仲間できり囲み
まわりには秋の実りも添え、
薔薇が人生の秘密の
公然たる意味を明かすように。

多彩にそして美しく、君の手から
形また形よ、流れいでよ、
そして人の像のなかで神がこちらに
目を向けてくださることを楽しむのだ。
君たちがどんな道具を使おうとも、
互いに兄弟であることを示そう。
そうすれば、生け贄を捧げる祭壇からは
歌声が響き燃えあがり、柱のように立ちのぼるだろう。

こうしたことはヴィルヘルムには非常に奇妙なこと、自分の目で見たのでなければ、不可能なことと思わずにいられなかった。しかし彼はこれらすべてを快く認めようと考えた。何事も隠されず自由に順序よく示され、明らかにされたので、彼にはこれ以上のことを知るために質問する必要もなかったが、最後に次のように案内者たちに話しかけずにはいられなかった。「ここでは、人生に望まれるべきすべての事柄に対して非常に賢明な配慮がなされていることがわかりました。さらに教えていただければ、どの地区で劇文学に対して同じような配慮がなされているのでしょうか、どこに

行けば、このことについて教えていただけるのでしょうか？ 私はあなたがたの建物をすべて見学してまわりましたが、この目的のために定められたと思われる建物が見あたりません。」

「そのご質問に対して、隠さず申しあげなければなりません。私たちの州のどこでも、そのようなものに出くわすことはないのです。つまり劇文学とは、野卑な民衆と言ってもいいかもしれない無為な集団を前提としているのであって、私たちのところにはそんな連中は存在しないからです。そのような無頼の徒は、いやになって自分から出ていってしまわないなら、境界の向こうに追いやられてしまうのです。とはいえ全般的な活動をする私たちの施設ですから、このような重要な点も十分に考慮してきたということは信じてください。しかしどの地区でもうまくいかず、いたるところで由々しき懸念が生じたのです。偽りの快活さや見せかけの苦痛によってその瞬間に何の関係もない虚偽の感情を呼びおこし、それによって常に好ましからざる楽しみをさまざまに生みだそうなどと、私たちの生徒のうちの一体誰が軽々しく決心するのでしょうか？ そんな悪ふざけを私たちは危険視し、私たちの真剣な目的と調和させることはできなかったのです。」

「しかしですね」とヴィルヘルムは応じた、「広く周囲に働きかけるこの芸術は、その他の芸術も一緒に促進すると言われてはいますよ。」

「とんでもない」と返ってきた、「演劇は他の芸術を利用し、台無しにするのです。俳優が画家の仲間になることを私は悪くは思いません。しかし画家が俳優の仲間に加われば、彼はもうおしまいです。」

芸術と人生が与えてくれるものを俳優は無責任にも彼の束の間の目的のために浪費し、少なからぬ得をするでしょう。それに対して画家は、自分も劇場から何か利益を引きだそうとしても、いつも損ばかりするでしょう。音楽家にしても同じことです。すべての芸術は兄弟姉妹のような関係で、たいていの芸術は互いに家計を助けあうように思われますが、ただひとつ、軽薄で、家族みんなの富や財産を一人占めして食いつぶそうとするものがあります。演劇がそれです。演劇は素性がいまいで、芸術としても手仕

事としても、そして素人芸としてもその素性を認めることはできません。」

ヴィルヘルムは深いため息をついて視線を落とした。彼が舞台の上そして脇で味わった喜びと苦悩のすべてが、突然にありありと思いだされたのである。自分の生徒たちをあのような苦痛から遠ざけることができ、確信と原則によって生徒たちの世界からあのような危険を追放した敬虔な男たちを、ヴィルヘルムは祝福した。

しかしヴィルヘルムの案内人は彼を長らくそのような物思いにふけらせてはおかず、さらに続けた。「私たちのもっとも重要で神聖な原則はどんな天分も才能も誤って指導しないことですから、たくさんの生徒のなかにはおそらく生まれつきの芝居の才能も確実に現れてくることに、私たちは目を閉ざすことはできません。こうした才能は他人の性格や容姿、動きや言葉づかいを物まねしたいという欲求となって現れます。私たちがこれを助長することはありませんが、その生徒をよく観察し、彼が自分の能力に忠実であり続けるようなら、私たちはあらゆる国の大きな劇場と連絡をとりあい、才能を認められた者をそこに送りだすのです。そうすれば彼は池のあひるのように舞台の上で一生のあいだ動きまわり、ががあと鳴くための指導を大急ぎで受けることができます。」

ヴィルヘルムはこれを我慢づよく聞いていたが、半ば納得したに過ぎず、おそらく不愉快な気持ちにもなっていた。というのも人間とは奇妙なもので、愛着のある対象でもそれが無価値であることを確信し、それから離れ、それを呪いさえすることがあっても、それを他人から同じように扱われるのは見たくないものなのである。ひょっとすると、すべての人間に宿る反抗精神がこの場合以上にむくむくと頭をもたげ、活動することはないかもしれぬ。

ここで、この書物の編集者自身も告白しておこう。私もこの奇妙な箇所を大目にみることにはいささか不満なのである。私もまた、さまざまな意味で節度を超えて演劇に人生と力を注いできたのではなかったか？ そしてこのことが許しがたい過失であり、実りのない徒労であったと人に言わ

れて、果たして納得できるだろうか？

しかしこのような回想や不愉快な共感に浸っている暇はない。というのも私たちの友ヴィルヘルムが、三人会のうちの一人、とりわけ彼が好感を寄せる男が目の前に現れたので、嬉しい驚きに遭遇しているのだから。この上なく純粋な心の平穏を告げながら、相手を受け入れる柔和な気持ちが伝わってきて、非常に爽快な気分させられた。遍歴者は信頼しきって歩みよることができたし、相手が彼の信頼に応えてくれるのを感じた。

ここで彼が聞いたところでは、学園長はちょうど聖堂にいて、そこで指示を出し、教え、祝福を与えているという。一方、三人会は分担して全地区を訪問し、獲得した非常に深い知識と部下の監督者との申しあわせにしたがって、どの地区でも導入されたものをさらに導き、新しく定めたことを基礎づけ、それによって高度な義務を果たしているところであった。

まさにこの立派な男から、ヴィルヘルムは彼らの内的状況や外的結びつきに関するどちらかといえば全般的な概観を与えられ、異なるすべての地区間での相互作用について教えられた。さらに明らかになったのは、比較的長い期間のあとであれ、短期間のうちにであれ、生徒がある地区から他の地区に移される可能性もあるということだった。とにかく、これまで見聞してきたこととすべてが完全に一致していた。同時に自分の息子に関する説明にも非常に満足し、この子の今後の指導計画にヴィルヘルムはすっかり賛同せずにはいられなかった³⁵⁾。

続いて彼は³⁶⁾、助手であり監督者でもある男からまもなく始まる山祭りに招待された。山登りはひと苦勞だった。しかも夕方が近づくと、ヴィルヘルムには案内人がさらに歩みをゆるめたように思われた。まるで暗くなくても彼らの行く道がこれ以上邪魔されることはない、という様子であった。そして深い暗闇に包みこまれたとき、その謎が解けた。小さいいくつ

35) 2稿はここで第2巻第8章が終わる (ebd., S. 531)。

36) 2稿ではここから第2巻第9章が始まるので、人称代名詞 er が Wilhelm になるなど微調整されている (ebd.)。

もの炎があちらこちらの山峡や谷間からゆらゆらとひらめき現れ、それらが幾筋もの線となって伸び、山の高みを越えてこちらに近づいてくるのが見えた。火山が爆発し、爆音とともに火を吹き周囲一帯を破滅の脅威にさらすのに比べれば、この光景はずっと好ましいものであったが、炎は次第に勢いを増し、幅を広げ、密集し、まるで天の川のように輝き、穏やかで愛らしいとはいえ、辺り一面に広がる大胆さを見せつけていた。

あっけにとられている客人の様子を同伴者はしばらく楽しんでいた。というのも遠くからの光が道だけでなく彼らの顔や姿まで明るく照らしていたため、彼らは互いの様子をじっくり観察することができたのである。それから同伴の男は話しはじめた。「あなたがここでご覧になっているのは不思議な光景です。これらの光は一年中、昼も夜も地下で輝き、手の届かないところにある隠された地球の宝物を採掘するために働いています。しかし今、その光が深い穴から湧きだし溢れだし、開けた夜空を明るく照らしているのです。これほど楽しい観閲式をこれまでにご覧になったことはないでしょう。地下に散り、視界から遠ざけられたもっとも有用な仕事が、すっかり私たちの目の前に姿を現し、ひとつの神秘的で巨大な塊にまとまるのを目の当たりにできるのですから。」

このような話や考察をしながら彼らが到着したのは、明るく照らしだされた島のような空間を炎の湖がとり囲み、その湖へと炎の小川が流れこむ地点であった。遍歴者は、今や目もくらむ明るさの輪のなかに立っていた。何千となくまたたく光は、列をなして真っ黒な書割となった炎の担い手たちと不気味なコントラストをなしていた。やがて非常に晴れやかな音楽が力強い歌声に合わせて鳴り響いた。空洞になった岩の塊が機械仕かけでこちらに近づいてくると、喜ぶ観客たちの目の前でまばゆい内部が開かれた。芝居がかった演出や、群衆の集まるこうした瞬間を盛り上げるものがすべてそろう、楽しむ人々の注意を高め、満足させた。

しかしヴィルヘルムが主要人物たちに紹介され、彼らのなかに威厳のある立派な服に身を包んだ友人ヤルノーの姿を見たとき、彼はどれほどの驚

きに満たされたことだろう。この男は大きな声で叫んだ、「ぼくが名前を変更し、より重要な意味をもつモンターンを名乗ったことは無駄ではなかったよ。ぼくはここで山や山峡の事情に精通し、今では君の質問に対して、一年前にはぼくにとってもまだ謎であったことも明らかにし、説明することができるだろう³⁷⁾。」

ここから、私たちは入手した原稿を当てにすることができなくなる。友人同士の会話についての記録が何も見つからないのである。同様に、次に起こったこととの関連を正確に挙げることもできない。しかし、この件については同じ書類束の同じ紙に短い記述がある。つまり、私たちの遍歴者がロターリオとアベに会ったというのである。残念ながら、ここでも多くの紙面と同様に日付は抜けている。

報告というよりも宣言するように表明された数箇所には諦念が示唆されている。この崇高な精神を通じて、ようやく人生への本格的参入が可能となる。さらに、順々に続いたいくつかの矢印が記された一枚の地図がある。矢印の横には、連続した数日分の日付が書きとめられている。さまざまな印や暗号が追加されているため、さらなる秘密の意味がまだ隠されているのではないかと懸念されるが、もしそれがなければ、私たちは現実世界の遍歴に引きもどされ、そしてヴィルヘルムの次の旅程をはっきりと確信できると説得させられることだろう。

しかし私たちがどうしても現実の出来事として把握できないのは、これらすべてにあのもっとも真実らしくない物語が直接に繋がっている、という不可解な事情なのである。それは聞き手の好奇心を奇跡によって引きとめておいて、結局は「これはすべて夢だったのです」で幕を閉じるメールヒェンのようなものである。とはいえ、私たちは目の前にあるものを書かれてあるとおりにそのまま伝えることにしよう。

37) 「今では君の質問に対して」からこの章の終わりまで2稿ではすべて削除される。

私たちはこれまで鉱石を豊かに含む山岳地帯に滞在していたが、山上はおだやかで決して荒々しい様子はなかった。そこで私は道案内を乞い、険しく、ほとんど登頂できそうにもない峡谷と岩場を越えて進んでいった。いよいよ山頂に到達すると、そこは断崖で、頂上には人が一人立てるだけのスペースしかなかった。そこに立って身の毛もよだつ谷底を見おろすと、黒い峡谷を泡立ち流れていく力強い水流がいくつも見えた。今回はめまいも戦慄もなく見おろすことができた。気分は軽やかだった。そのとき、私の注意は向かい側にそびえるちょうど同じように急斜面の岩場に引きつけられた。その頂上にはこちらよりも大きな平地と空間があった。恐ろしい断崖によってわけ隔てられていたとはいえ、たくさんの人々が近くに押しよせてきたため、私は肉眼でもはっきりと何人かが山頂に集まっているのを見ることができた。それはほとんど女性だった。そのうちの一人が崖っぷちまで身を乗りだすので、二倍も三倍も私を心配させたとき、それがナターリエであることを私は確信した。このような思いがけない再会の危険性はますます高まっていった。望遠鏡を目の前にすると彼女の像は本当に間近に近づき、私を彼女のもとに引きよせんばかりになったとき、この危険は極限に達した。望遠鏡というものは何か不思議な力がある。もし若い頃から望遠鏡で眺めることに慣れていなければ、望遠鏡を目の前にするたびに、毎回、ぞっとして驚愕することだろう。見ているのは私たちでありながら、私たちではない。それは、器官が高度に高められ限界が解消され、無限へと到達できるような存在なのだ。

たとえば、そのような手段を使って遠方の人々の話を盗み聞きしたり、無害で罪もないそぶりをして、ほんやりと、まるで一人で何も見ていないようにふるまいながら、実は彼らを覗いていたりするようなことがあれば、私たちは本当に不安になるだろう。彼らは私たちを発見し、あつかましい裏切り行為に感情を害し、怒ることだろう。

そして同様に私を悩ませたのは、遠近のあいだをふらつき、一刻一刻と両者を混同してしまう奇妙な感情だった。

向こう側の人々も私たちに気づいていた。白いハンカチで合図を送っていることから疑いなかった。一瞬、私はあいさつを返すのをためらった。自分が敬愛する女性のすぐそばにいるように思えたからである。それは彼女の純粹で愛らしい姿だ。かつて私にとってあれほど慈悲深く思われた彼女の腕、不運な悩みや混乱に耐えたあと、たとえつかの間であれ、ついに思いやりをこめて私を抱いてくれた、あのすらりとした彼女の腕なのだ。

彼女も望遠鏡を手にして、私のほうを覗いていたことがはっきりわかった。そこで私は、彼女たちがしてくれたように、合図によって誠実で心のこもった愛情を表明することを怠らなかつた。

経験からわかるように、望遠鏡を通してはっきりと見つけた遠くの対象物は、より正確な知識によって感覚が鋭くされるからなのか、あるいは感覚に欠けているものを想像力が補うからなのか、とにかく裸眼になったそのあとも、はっきり近くにあるように正確にその姿を現すものだ。つまり、彼女の仲間たちのことはまだ区別がつかないのに、大切な女性には手が届くように私には思われたのである。私は懸命になって彼女をますます求めた。救いの手が私をつかみ、危険と同時にもっとも美しい幸福から私を引きはなさなければ、谷底が私を飲みこむところであった。

[第13章終わり]

今回の試訳について

今回訳出したのは初稿全 18 章の第 13 章で、大半が 2 稿の第 2 巻第 8 章および第 9 章の冒頭部分に対応している。

初稿では第 10 章と第 11 章で 1 回目の教育州訪問が描かれ、第 12 章でのミニヨンの故郷めぐりを終え、ちょうど 1 年後、第 13 章で 2 回目の教育州訪問となる。2 稿では再訪までの期間変更に合わせてフェーリクスの成長の描写が加わったことを除いて、2 回目の教育州の描写は 1 回目と同様、細部の変更にとどまっている。続いてヴィルヘルムは鉦夫たちの祝う山祭りに招待され、そこでヤルノー = モンターンに再会する。2 稿では山祭りの場面で章が替わり、第 2 巻第 9 章で山祭り、旧友との再会、さらに地球生成をめぐる議論とそれに続くモンターンとの会話が描かれる。ここでヴィルヘルムは彼がこれまでの時間をどのように利用したか——言明されないが、外科医としての専門教育——を説明するが、このモチーフは初稿にはまだ存在せず、祭りのあとの地球生成をめぐる議論以降の第 2 巻 9 章後半部は初稿には完全に欠けている。その代わりに上に訳出したとおり、資料の不備についての編集者の苦情³⁸⁾とともに、編集者にも真実とは思われないというメールヒェンめいたヴィルヘルムの手記が紹介されて、2 回目の教育州訪問の章が終わる。

2 稿では削除されてしまう望遠鏡を介してのヴィルヘルムとナターリエの再会と危機のエピソードは、初稿においてどのような意味をもっていたのだろうか。

巻分けのない初稿であるが、このエピソードを境に小説を前半と後半に分けることができる。前半部では、ナターリエから遠ざけられ諦念を強いられたヴィルヘルムが、レナルドーの説得やナホディーネ探しなど次々にミッションをこなしながら旅を続ける。その間、彼は自ら経験したことを

38) アルヒーフの不備についての編集者のコメントは、初稿第 11 章末尾の「中間の言葉」および第 13 章冒頭にも見られる。

ひたすら愛するナターリエのために記録し送り続けている。ヴィルヘルムは「聖ヨゼフ二世」、「くるみ色の少女」そして「50歳の男」の当事者たちと直接に交流するが、これらの人物たちもまた、それぞれに情熱を抱え、諦念という課題に向きあっており、枠組みの世界とノヴェレの世界は同じ地平におかれている。一方、第14章からの後半部では、今やその資格を得たヴィルヘルムが遍歴組合と過ごす三日間が描かれることになる。確固とした諦念者たちの活動を枠組みに、情熱にふりまわされる人間たちの物語「新メルジエネ」「気のふれたさすらいの女」「裏切り者はどこに」が挿入されるが、枠の世界とノヴェレの世界は完全に切りはなされており、前半と後半では小説構造に大きな違いがある。その節目におかれたのが山頂でのヴィルヘルムとナターリエの奇跡的な再会のシーンである。

ふりかえれば、第1章でヴィルヘルムはある山の頂から、これからますます遠ざかるナターリエに名残りおしく手紙を書いていた。今、第13章で彼は——小説冒頭の地に戻ってきたのかは定かでないが——ちょうど同じように山頂に登り、恐ろしい谷底を挟んで向こう側に見える山の頂に、恋しいナターリエの姿を発見するのである。望遠鏡で覗いた恋人の姿は手を伸ばせば届くほどに間近に迫り、ヴィルヘルムは我を失い、危うく山から転落しそうになったという。現実だったのか幻だったのか保留を残しつつ、この場面はヴィルヘルムが1年間の遍歴の末に、恋人への情熱を最終的に克服したことを暗示するエピソードとなっている。ナターリエのヴィジョンという最大の危機を乗り越えた諦念者ヴィルヘルムはいよいよ「人生への本格的参入」をめざし、第14章で諦念者たちの活動領域に入っていく。

改稿作業に着手した当初、ゲーテはこのエピソードの意義をなお重視していたようである。作業の要所所で成立した重要な5つの基本シエマのうち、1825年6月28日にゲーテはまず小説の分け目——この段階で『遍歴時代』は2部構成になる予定であった——を模索する小さなシエマ(基本シエマ1)を記したあと、それをもとにしてより詳細なシ

ューマ（基本シェーマ2）を作成した。基本シェーマ1には山頂のエピソードに対応すると思われる「山での幻像／望遠鏡なし」（*Bergerscheinung / ohne Gläser*, ebd., S. 801）という言葉が見出されるが、これは一旦、第2部に書きこまれたあと、第1部に移動されている。続く基本シェーマ2では第1部の終わり近く第17章に「山岳／幻像」（*Gebirg / Erscheinung*, ebd., S. 803）とある。これらの資料から推測できることは、ゲーテはこの山頂のエピソードから望遠鏡や眼鏡といった技術的発明による倫理的な混乱という問題を切りはなし³⁹⁾、ヴィルヘルムが純粹にナターリエの幻像を見るエピソードに書き改めようとしていた可能性である。

さらに、教育州の祭りやモンターンとの再会は第2部に組みこまれているにもかかわらず⁴⁰⁾、ゲーテがこのエピソードだけを第1部に移動させている点も見落とすことはできない。ゲーテが二人の再会のメールヒェンを小説前半のヴィルヘルムの遍歴の締めくくりとみなしていた証だろう。1825年夏に作成された基本シェーマ3では、このシーンは第1巻の最終章におさまっている（*ebd.*, S. 805）。

しかし、それ以降のシェーマは第2部そして——3部構成への変更が決まってからは——第3部の作業に特化したものとなっているため、この山頂のエピソードがいつ削除されたのかを見極めることは難しい。2稿ではナターリエの存在感そしてヴィルヘルムとのつながりが大きく後退するため、彼がナターリエへの情熱を克服し、真の諦念者に成長したことを暗示するエピソードの意義も失われていったのだろう。この点については稿を改めてさらに検討したい。

39) その代わり2稿ではマカーリエの屋敷の天文台でこの問題が取りあげられることになる（第1巻第10章）。

40) 基本シェーマ2では、第2巻第3章に「教育州の祭り」、第4章に「モンターン」とある（*ebd.*, S. 802）。